

救急医療部門における家族の悲嘆と死別体験

～突然に大切な人の死に直面する家族の体験を理解する～

看護学部 実践基礎看護学講座 看護病態学

○助教 ^{いとう よしやす} 伊東 由康

キーワード

救急医療部門、死別、悲嘆、スコーピングレビュー

研究概要

救急医療部門では急性かつ重篤な患者への医療を提供する部門であることから、救命が困難であり、死に至る患者も少なくありません。そして、ご家族においては、大切な人との死別と悲しみ（悲嘆）を体験することとなります。死別という体験は誰もが経験するものであり、悲嘆は死別に対する正常な反応であることが知られていますが、時にさまざまな症状や病気を招き、ご家族の健康を損なうことも知られています。特に、救急医療部門で亡くなる患者のご家族では、予期せず突然に大切な人との死別を体験することが多く、死別に伴う衝撃や苦痛が強く、健康を損なう可能性が非常に高いことが知られています。そのため、救急医療部門の医師や看護師といった医療従事者にはご家族を支えるための関わりが求められてきます。しかし、救急医療部門においてご家族が体験する死別と悲嘆とは、どのような体験であるのか十分には理解されていません。そこで、本研究では、救急医療部門における家族の悲嘆と死別体験について探求し、ご家族の体験についての理解を深めることを目的としました。研究の手法としては、これまでの研究（文献）での知見を網羅的に収集し、その性質やトピックを調べていくスコーピングレビューという方法を用いました。その結果、ご家族の体験を表す6つのテーマが抽出され、情報提供の不十分さやプライバシーへの配慮の欠如といった解決すべき課題が示唆されました。

表 1 救急医療部門における家族の悲嘆と死別体験に関する6つのテーマ

テーマ	説明
情報の不足	ご家族は何が起きているのか医療従事者が教えてくれず、説明してくれず、患者が治療を受けている間、情報不足による不満や動揺を感じながら過ごすことを体験していました。
突然の悪い知らせ	患者に何が起きているのかも分からないなか、ご家族は突然に患者の死という悪い知らせを告げられることを体験していました。
蘇生場面への立ち会い	多くのご家族は患者の傍にいたいという思いを抱く体験し、患者の蘇生場面に立ち会うという選択肢を与えてもらうことを強く支持していました。
混沌とした環境	ご家族はプライバシーのない環境で、慌ただしく動き回る人々に囲まれて過ごすことを体験し、患者とのお別れのためプライベートで静かな場所を必要としていました。
死別に伴う心理社会的反応	ご家族は死別に伴い、見捨てられ感や怒り、悲しみ等のさまざまな心理的反応を体験し、特に、罪悪感を生じることがもっとも共通した体験でした。
医療従事者によるサポートとケアへの二ード	ご家族は、医療従事者からのサポートやケアが不足していることを体験しており、医療従事者による死別後のフォローアップを望んでいました。

アピールポイント

本研究は、第15回国際家族看護学会学術集会(15th International Family Nursing Conference)で成果発表を行い、優秀ポスター賞を受賞しました。また、本研究の成果は、看護学系の国際学術誌(Japan Journal of Nursing Science)に掲載予定です。